ロドリゲス著
日本大文典を読んで

今泉忠義

土井博士のお骨折で、私どもはこの日本大文典の全貌を見渡すことができた。お礼を申す次第である。著者が外国人であるだけに却っていいところに眼をつけてゐる。イッコクは一国で、イチコクは一石だといふ。なるほどさうかなと思はせられる。先祖に「せんしょ」の仮名を振ったのを見た覚えがあるが、何だったか思ひ出せない。本書でも「シェンジョ」を見ることができたのは実におもしろい。かういふ音韻の側ではンやウの次の清音を濁るのを私は一々ンの次だから、ウの次だからとこれまでいってゐたのに、当時既にこれを心得てゐて、「うむの下濁る」といふきまった言ひ方のあったのには驚いた。それから日葡辞書でも「亀の甲」の甲は、どういふものか、合音である。節用集も合音だったと思ふ。中国でも南方音や台湾の音では合音だ さうだから、何か理由があるのだらうが、わからない。これと似たものでは「昴」がコウであること、平方の時は例へば「四方」ではホウであることをこの文典で覚えた。更級日記の定家本には明かに「よほう」とある。一律にヨホウとなってゐるのでもないやうだが、そして理由はわからないが、更級の「よほう」は一往あっても変でもないことがこれでわかったやうな気がする。なほ、勾欄と書いたりするのが仮名ができでは「かうらん」であるのも私にはわからない。高欄だらうかとも考へてみたりした。日葡辞書その他みな開音である。万葉はマンエフではなくて、マンネフであっただらうと思はれるのは、この文典の引例ばかりではないが、山野・玄恵・べけんや・観音・人間は・大切は・昨日はを、みな「にゃ」「にょ」「にぇ」「にゃ」「のん」「な」「つった」「った」といったことからも考へられると思ふ。それから「浅き夢

見し酔ひもせず」の「し」もおもしろい。何の意味も大して考へて読まないで、あの頃ではもう「見じ」でなくて見しといったものと見える。その「酔ひ」は、普通は「ゑひ」ともいひ「よひ」ともいふとある。しかし現在形は必ず「よふ」だとある。「ゑふ」は忘れて来たのである。いふまでもないことだが、「ずは」「よくは」「まじくは」などの「は」はすべてワで清音。吉利支丹物は大体「くわ」「ぐわ」「じ」「ぢ」「ず」「づ」は区別してゐるのに、菅丞相をカンシャウジョとしてゐるのは変である。天草本平家で、平治をヘイジとしてゐるところの多いことを思ひ出す。「御存知あらう」の「存知」を「存じ」の類推かと註してをられるが、もうそろそろ混乱の時代に入ってゐたことは疑へない。

次に私は「をる」の用例が探したかったのだが、「書いてをる」「持ってをる」(二〇三頁)しかなかったのはどういふことか。みな「ゐる」である。日葡辞書にもない「浅からしい」「よからしい」「薄からしい」「思はしい」「悲しましい」「敬まはしい」「学ばしい」といったやうな形容詞は果してどのくらゐ用ゐてゐたのであらうか。吉利支丹物にあるもので、日葡辞書に見えないことばがかれこれある。「ほめちぎる」の「ちぎる」、「病眼」の「やまうめ」などもその一部である。それから「強まる」「広まる」「添はる」「備はる」「暖まる」「焼(く)ばる」などの動詞の多くなったこと、「取るる」「切るる」「書くる」などが急に多く現れたことには驚異を感じる。後者が今の「取れる」「切れる」であることはいふまでもない。かうなる前に一度「るる」「むる」の時代があったのである。それから、「行くけれども」「深いけれども」などの「けれども」がまだ出て来ないのは当然であるが、何故かもう、「あらうけれども」のやうに、「う」に続く「けれども」は全く接続助詞として現れてゐたのもおもしろいと思ふ。「食ひたかった」は一人称に、「眠たがる」は二人称と三人称に用ゐるといふのも、実用文法としては当然であるが、これもおもしろい。次に国語に多い利害関係をあらはす受身の中でも特に害を受ける場合に用ゐられることが多いために、私などは迷惑の受身といってゐる用法「首を討たるる」のやうなのを、身体の部分又は事物を意味する対格をとるといってゐるのも、うまい見方をしたものだと思った。対格といふのは、目的格の助詞「を」をとるといふのである。だから、「ちっと物が申したい」のやうな「が」は対格だと説明してゐる。「……ことがない」といふやうに、「が」があってもよさそうに思はれるところに、案外に「が」の現れないことが多い。今年教材に抄物を使って大いに感じさせられたのであるが、やはり本書の用例にも「上ぐる事ない」「上げぬ事ない」「あげたことあるまい」などが見える。「が」がどうもまだこんなところには現れにくかったものらしい。狂言にもこの傾向が十分見える。「舟に乗る」「舟を乗る」の別(三八二頁)。また、「水を汲みに参る」(三九一)・「それがしをお方々のおかまひは」(三六六)・「仰せられた事共を御後悔でござらうずれ」(四二七)などの例。みな、おもしろいと思った。「けれども」の接続助詞として現れたことは前に述べたが、「上げたらば」「上げたならば」のやうな、「ば」がなくなるなら、今の口語と同じやうなのがもう現れてゐる。「たら」はどこまでも仮定で、「昨日あの人に会った

ら」などいふのはずっと遅いのである。それは、「我等が所へ御出でなされたらば、面目を施しまらせうず」（八二）といふ用例を見ればわかる。次に、「てもどる」「て進ずる」「て下さる」「て行く」など、「て」を用ゐて表現するのは、甚だ上品だといふのもおもしろい。動詞状名詞としてあげてある「なかって」のやうな、今は殆ど用ゐられないやうな言ひ方も相当に行はれたらしい。次は「さかひに」である。「時に」の意としてあるところから見ても、今の大阪辺の「さかひ」は、やはり堺であらう。七〇頁を御覧いただきたい。それから、「敵は千騎万騎あらうとはからひ」（九〇）の「はからひ」は、「あらうとも」の意とある。これもおもしろい用例である。

方言では、関東の「くらべる」「あげる」「もとめる」のやうな下一段の行はれてゐたこと、同じく関東の「借りて」のやうな上一段、同じく「あぐべい」「よむべい」など、ある地方でと断ってはあるが、「申さないでござる」も関東方言であらう。九州・関東では「まらする」の代りに「申す」とあること。「やらん」を長崎では、「長崎とやらぁ」といふとある。これは私には郷里の方言「行かあ」「読まあ」を聯想させる。これは「行かん」「読まん」だからである。真直をマツグといってゐる（五一）。これは、今の「まっつぐ」であらうか。四八七頁の「門をだしも押しも立てず」（平家一ノ四）の「だしも」は変だと思った。複製で調べると「だにも」となってゐる。

「上げさい」「読まい」が親が子に、或は下男下女に物をいふのに用ゐられるとある。これもおもしろいと思ふが、「食ひあったか」のやうなのは敬意が低く、「あげさしめ」「定めさしめ」は甚だ下品だといふこと、「着せな」「見せな」「召されな」は非常に下品で殆ど使はれないとあること。これらについてもおもしろく感じられると同時に、考へさせられることもある。「召されな」は私は、「お…なさる」の上下略かとも考へてゐたが、ちょっとあぶなっかしくなって来た。それから、献上物の目録などで「おん樽とはいっても御白鳥とはいはない」といふのも、丁寧語ではあるが現代語で東京などではまだ魚の名には「お」がつかないし、花の名前には絶対につかない。これと何か関係が同じなのではないかとも思はれる。それから今と同じやうに、もう「御芳札」などといったこと、「わが」「それがしが」「みが」「みどもが」など一人称では卑下の「が」を用ゐるのに、「私の」といって、これは一人称でも「の」である。これは「私」が代名詞となったのが新しいからであらうか。「達」は最も尊敬しなければならない人に用ゐる接尾語であるといふのもよくわかる。ただ明治以後、この接尾語「たち」が急に敬意を失って複数の接尾語化して来た。「私たち」などもう当り前で、「鳥たち」「犬たち」も現れたばかりでなく、最近、産業経済新聞に、「店たち」が現れた（三〇・一〇・二七）ことをこの機会に私は報告しておかう。こんな用法もおもしろい。「京のお客の聞かせらるるがお恥しけれども」（客物語）（一九八）である。「お客」は自宅への客であらうか。敬はなければならない人のところへ来た客であらうか。「お恥しけれ」の「お」も。

婦人語とした語は日葡辞書にはあれほど多いのだから、この文典でも少しはこれに触れてもよさそうだのに、全然といっていいほど見えないのは不思議である。普通の語では、「四層倍」でなくて層に当るとこ

ろは開音のサウだから「四相倍」であったこと。

著者の見に感じたのは、「嬉しがる」「行きたかった」などの「がる」「かる」は動詞の「あり」「ある」だと思ふといってゐること、下の地方即ち九州の「行くらう」などの「らう」は書きことばの「らん」に当ると考へたこと。その代り、「らしき」の「しき」を「敷く」ことであらうといったり、相当に細かな点にも気をつけてゐながら、「さうらふ」と「ざうらふ」（候）との区別を無視したりしたのは残念。しかしいろいろなことが教へ貰へた。

（東京都千代田区神田神保町一ノ一三省堂　二〇〇〇円）

―国学院大学教授―